

「アドミラル・トーゴ」

増山雄三

先日、六甲山系の麓に位置する会下山に登った時、山頂にある公園の南端に、高さ三米ほどの石碑が立っていて、刻された字をみると、それは、沈黙の提督といわれた「東郷平八郎」が、八十五才のとき、「大楠公湊川陣之遺跡」と揮毫した文字が書かれている。

ところで、東郷平八郎（一八四八～一九三四）という人物は、薩摩国鍛冶屋町に生まれて、明治時代の日本海軍の指揮官として、日清及び日露戦争の勝利に貢献し、日本の国際的地位をたかめ、国民の尊敬を集めた。

とりわけ、日露戦争では、当時の世界屈指を誇ったロシアのバルチック艦隊を、日本海海戦で敵前回頭戦法をとり破って、日本艦隊を勝利に導き、世界の注目を集めた。

東郷は、鍛冶屋町という薩摩城下としては

いわば場末のサムライ団地で、薩摩藩士の東郷実友の四男として生まれたが、東郷家のすぐ近くにある一画には、大久保利通の大久保家が、さらに大山巖の大山家があり、そしてまた「西郷隆盛」の西郷家もあった。

十四才で元服してすぐ、薩摩藩士として薩英戦争に従軍、五年後に分家し一家を興したあと、戊辰戦争では春日丸に乘組み、新潟から箱館に転戦して、阿波沖海戦や函館戦争それぞれに宮古湾海戦でも戦った。

戊辰戦争が終わった時、彼は薩摩藩の三等士官だったが、幸い、新政府の海軍に横滑りして、最下級士官の少尉見習いになりつき、うまいことに英国行きの話があったので、東京で英語を少し学び、そして、英国に七、八年（一八七一一八年）滞在し、その期間の真ん中の二年間、商船学校のウースター校に在学したのは、彼が二十六才のときで、ただ一人の外国人でありまた東洋人でもあった。

この在校生は、殆どが十四、五才の子供

ばかりだったので、二十六にもなったおじさんが、子供の様な人達と一緒に学んでも、ついていける筈はないし、言葉も理解できず、他の生徒たちの話す冗談も分らなかつた。それでも、彼がウースター校に留学していたとき興味を持った学課は、軍人が興味を持つ様なものでなく、海の貿易に関する商法や国際法で、これを学んだ事が、後の日清戦争で、英国商船を撃沈した事件で役立った。そして、東郷が英国から日本へ帰国する途上、西郷隆盛が西南戦争で自害したことを知り、「もし私が日本に残っていたら西郷さんの下に馳せ参じていただろう」と言って、西郷の死を悼んだというが、実際、彼の実兄である小倉壮九郎は、薩軍の小隊長として従軍して、城山攻防戦の際に自決している。さて、日露戦争のことである。日清戦争後の東郷は、一時病床に伏していたが、日露開戦前の緊迫時期に、海軍大臣の山本権兵衛に呼ばれ、連合艦隊司令長官に抜

擢された際、山本は「東郷というのは運がい
い男だから、バクチは運のいい人に打たせね
ばならない」といって選んだのだ。
そして、東郷が連合艦隊司令長官になった
時、兵学校出の有能な島村という参謀長がい
たが、島村が東郷に、「私のスタッフに秋山
真之という、いささかラフながら有能な男が
います。使ってくださいませんか」とい
うと、東郷は「いいよ」といって秋山を
作戦参謀に起用し、こうして、日本海
海戦の全作戦が、三十余才の秋山に任
されたのである。
秋山は、松山出身の士族で海軍に入り、
大尉のとき、ワシントンの日本公使館
付の武官になり、米西戦争を観戦した
が、その際、軍艦の叩き合いだけではだ
めだ、新たな戦術を開発せねばならな
いことを痛感し、滞在を終り東京に帰
って、瀬戸内海で曾て活躍した、能島
水軍の戦術書を読むと、そこには、名
人芸は必要でなく、何か自分で考え
ついたことが、発想の転換になると
発信されていた。

ところで、もう四十年以上前になるが、私は横須賀にでかけ、三笠公園にある東郷平八郎の銅像横に繫留されている、艦隊旗艦だった「三笠」を訪ねたことがある。

第二次大戦後、戦艦三笠は荒れ果て、米軍人用娯楽施設の「キャバレー・トーゴー」などができたりしたが、これを憂いた米艦隊司令のニミッツは多額の寄付をし、東郷への思いを込めて三笠の復興と保存に尽力した。

復元された三笠の艦橋に上がると、その艦橋は実に高く、その真中に三畳敷き程の鳥が巣をかけたような小さな板敷があり、その場所には、東郷さんは長い海戦中、微動だにしなかつたということに驚いた。

東郷は恐らく、統率者としての自分の役目は、三笠の艦橋に立ち尽くして死ぬことだと思っていたのだろうが、至近弾が落ち水柱で水飛沫がかかると、彼が動かなかった証拠に、戦いが終りそこから下りていったときには、白い靴跡が残っていたという。

艦橋で旗のようにして立つ東郷と頭脳の秋山、部署々々で働く人々の役割分担がうまくいく、日本人のもつ組織力学の典型が、見事に示されていたように思える。

秋山がとった戦術は、彼が学んだ能島水軍から得た、「まずわが力をあげて敵の旗艦を破ること」という戦法に加え、「全力をあげて敵の分力に乗ずること」と、「常に敵を掩うように運動すること」の二つがあった。

後者が、有名なT字型展開になったが、露軍と遭遇したとき東郷艦隊がT字を取りはじめた時、露旗艦「スワロフ」艦上の参謀は、「しめた」と思ったが、それは、これ迄の法則にない異常な艦隊展開だったからだ。

それでも結果は、秋山真之の作戦通りになり、バルチック艦隊は、三十八隻中、十九隻が沈没、七隻が捕獲抑留され、十二隻は中立港湾で武装解除され、司令官以下六千人が捕虜になったが、日本側では水雷艇三隻を失ったのみにすぎなかった。

日露戦争後の明治三十九年（一九〇六年）	に、東郷はその功により、大勲位菊花大受賞	と金鷄勲章を授与され、翌年には伯爵を受爵	して元帥府にも列せられ、さらにタイム誌に	は、「アドミラル・トーゴー」として、日本	人初のカバールパーソンになった。	退官後の晩年、盆栽や碁それに書を嗜んで	質素に過ぎたが、冒頭に話した会下山にある	石碑の書も、死の前年に揮毫したものだ、	昭和九年（一九三四年）、満八十六才で亡く	なり、死後、東京の渋谷に「東郷神社」が建	立され、「神」として祀られた。	そしていま、東郷の銅像は、三笠公園のほ	かには、生地である鹿児島が多賀山公園にも	あり、東京府中には「東郷寺」まであるが、	かくして、「西」に「東」と名前は違うもの	の、「西郷隆盛」と「東郷平八郎」は、いま	なお、鹿児島島の鍛冶屋町では、銚らしい「英	雄」なのである。	令和三年一月
---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	------------------	---------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	-----------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------	--------